

津和野町埋蔵文化財報告書

喜時雨地区埋蔵文化財  
試掘調査報告書 I

1996

津和野町教育委員会

# 喜時雨地区埋蔵文化財 試掘調査報告書 I

## 目 次

I. 調査に至る経緯.....	1
II. 位置と歴史的環境.....	2
III. 調査の方法と経過.....	4
IV. 調査の概要.....	5
I 地区 (TP 1 ~ 10) .....	5
II 地区 (TP 11 ~ 23) .....	6
III 地区 (TP 24 ~ 31) .....	17
V. 小結.....	20

# 例　　言

1. 本書は、1995(平成7)年度に国・県の補助金を得て津和野町教育委員会が実施した埋蔵文化財試掘調査の報告書である。

2. 調査を実施した場所は、島根県鹿足郡津和野町大字田二穂地内、通称喜時雨地区である。調査所在地と小字名は第1表(P19)のとおりである。

3. 調査を実施した遺跡は、喜時雨遺跡である。

4. 調査にあたっては、下記の方々にご指導いただいた。

広島県立美術館　　村上　勇　氏

島根県教育庁文化財課　　今岡　一三　氏

島根県埋蔵文化財調査センター　　間野　大丞　氏

5. 本書に用いた方位は、第1～3図は真北、その他は磁北を示す。

6. 本書中に用いた記号TPは、テストピット(試掘坑)の略号である。

7. 写真図版中の遺物番号は、遺物実測図の遺物番号に対応する。

8. 調査に伴う記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会で保管している。

9. 調査の体制は、下記のとおりである。

調査主体　山根津知夫（津和野町教育委員会　教育長）

事務局　益成　馨（　タ　）　教育次長

　　広石　修（　タ　）　文化係長

　　山本　博之（　タ　）　文化係

調査担当者　宮田　健一（　タ　タ　）

調査員　永田　茂美（　タ　）　嘱託

調査補助員　青木　光恵（　タ　）　臨時職員

外作業員　和崎定、和崎清子、竹岡保子、三東イヨノ、齊藤勲、齊藤ナツヨ、石井繁、

石井マツヨ、石井千代乃、石井タカ子、陶山ナツヨ、生田徳太郎、

益野巳之吉、三浦すみ子、藤井しづこ、舛成米子、石井信義、齊藤豊

内作業員　兼子和恵

調査協力者　和崎登、和崎定、田村亘敏、河野一雄、田村啓二、三浦美男、石井マツヨ、

西村靖（以上、土地所有者。敬称略）

鹿足郡津和野町土地改良区、斎藤勲(1995年度喜時雨地区嘱託)

ご協力いただいた方々には、この場を借りてお礼申し上げます。

10. 本書は永田の協力のもと、宮田が編集にあたった。

## I. 調査に至る経緯

喜時雨地区ではこれまでに弥生土器等が採集されており、周知の遺跡として知られてきた。1983年には、町民グラウンドの建設に先だって、町内では初の本格的な埋蔵文化財調査が行われている。この時の試掘調査及び追加調査では、一部で中近世の遺物、遺構の発見があった。



第1図 試掘調査区とその周辺 (1/10,000)

ところで、町内各所では1977年度以来、は場整備事業が実施されてきた。喜時雨地区においても团体営は場整備事業が計画され、事業主体である鹿足郡津和野町土地改良区と津和野町教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねてきた。そこで、事業計画地内の埋蔵文化財の分布状況を事前に把握し、保存についての資料を得るために埋蔵文化財試掘調査を実施することとなった。調査は津和野町教育委員会の直営事業として、国・県の補助金を得て実施した。

## II. 位置と歴史的環境

現在のところ津和野の歴史は縄文時代早期にまで遡り、高田遺跡(第2図1)、山崎遺跡(同図15)からは押型文土器が出土している。また、高田遺跡からは中期の阿高式、後期中頃の鐘崎式土器がまとまって発見され、対岸の大蔵遺跡(同図3)からは後期後半の西平式土器が採集されるなど、当時この地域が九州地方の情報の及ぶ範囲であったことが窺える。

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて集落が営まれていたことが高田遺跡で確認され、在地の土器群に混じって吉備地方から運ばれてきた外来の土器が発見されている。町内の古墳は、津和野川最上流の木部地区において鍛冶原古墳群が確認されているのみである。

高田遺跡からは奈良・平安時代の綠釉陶器、皇朝十二錢の一つ承和昌寶(836年初鋸)、大量の土師器、須恵器が発見されており、当時石見國鹿足郡能濃郷(元美濃郡鹿足郷)と呼ばれていたこの地域の重要な拠点が高田地区にあったものと思われる。

中世津和野の領主吉見氏は、弘安5(1282)年に元寇再防備のため能登国から津和野北部の木部地区に入り、その後14C代に津和野城を構えたと伝えられている。文献では吉見氏入部以前の記録はほとんど残されていないが、これまでの高田遺跡の発掘調査では12・13C代の白磁が大量に出土しており、吉見氏入部以前に津和野地方に有力者が存在していたことが考古学的証拠によって明確に分かりつつある。ところで、中世の津和野城の大手口は近世以降の大手口とは反対側の喜時雨地区にあったと伝えられ、吉見氏の居館も同地に存在していたとする説がある。喜時雨地区には「本門口」「本門前」など館の存在を示唆する字名、「要害山」「幾久(戦)」など天文23年(1554)年陶晴賢軍が津和野城を包囲した頃にさかのぼると考えられる字名、「吉見乳母の墓」と伝えられる石塔など中世の名残が各所に見受けられる。

関ヶ原の役後、吉見氏は毛利氏に伴い萩に移るが、その後坂崎出羽守の16年間の治領となり、津和野城の大改築・城下町整備など現在の津和野の景観の基礎となる大事業が行われた。その後、龜井氏11代225年間の治世を経て明治維新を迎えることとなる。

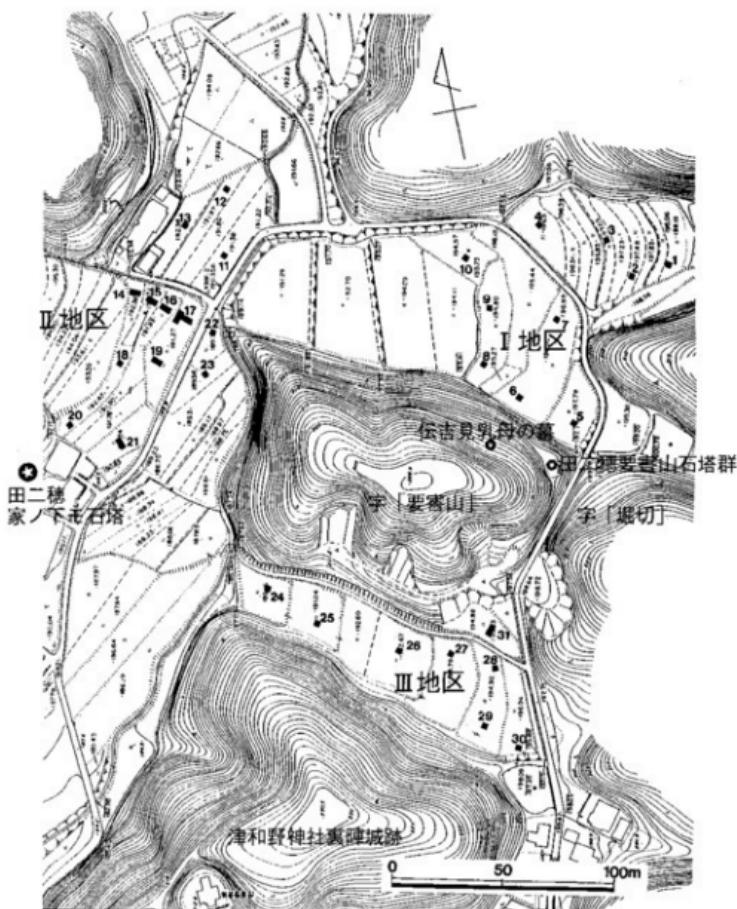


- |                   |                 |         |                 |         |
|-------------------|-----------------|---------|-----------------|---------|
| 1.高田遺跡            | 2.喜時雨遺跡         | 3.大蔭遺跡  | 4.中座遺跡群         | 5.津和野城跡 |
| 6.要害山             | 7.中荒城跡          | 8.茶臼山城跡 | 9.伝吉見民部墓（宝篋印塔）  |         |
| 10.鷺原八幡宮          | 11.陶晴賢本陣跡       | 12.横瀬遺跡 | 13.田平の至徳3年銘宝篋印塔 |         |
| 14.西中組遺跡          | 15.山崎遺跡         | 16.森遺跡  | 17.丸山遺跡         | 18.山根遺跡 |
| 19.伝吉見正頼夫人墓（宝篋印塔） | 20.伝吉見頼行墓（宝篋印塔） | 21.日浦遺跡 |                 |         |

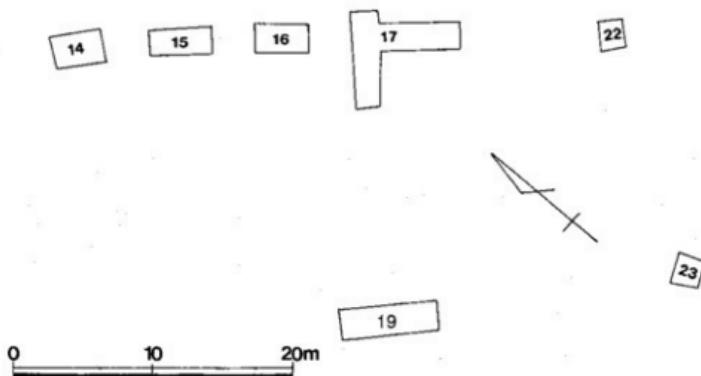
第2図 喜時雨遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（1/50,000）

### III. 調査の方法と経過

今後予想されるは場整備の計画範囲を対象にして、I～III地区までの3地区に合計31ヶ所のテストピットを設定した。現地調査は、発掘・実測作業を1996(平成8)1月19日～3月8日にかけて行った。



第3図 試掘調査区配置図 (1/2,500)



第4図 II地区TP14~17・19・22~23配置図 (1/400)

#### IV. 調査の概要

##### I 地区

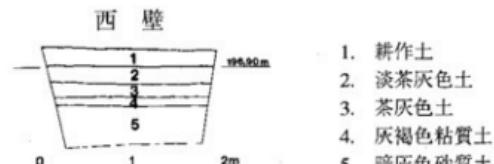
TP 1~10まで各  $4\text{ m}^3$  ( $2 \times 2\text{ m}$ ) の範囲を試掘した。いずれのテストピットからも中世以前にさかのほる遺物は出土しなかった。粘土、粘質土、砂質土、砂礫層が互層状に堆積し、所々に小さな自然流木が見受けられた。

TP 3 は第1層耕作土、第2層淡茶灰色土、第3層茶灰色土、第4層灰褐色粘質土、第5層暗灰色砂質土に分層され、第5層中から自然流木が出土した。

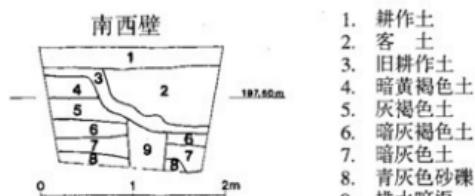
TP 5 は以前に田の町倒しを行っており、古い田面の下からは暗渠が発見された。

TP 6 も田の町倒しを行った土層堆積の状況が観察された。

TP 8 は、第1層耕作土、第2層灰褐色土、第3層暗灰褐色粘質



第5図 TP 3 (1/60)



第6図 TP 5 (1/60)

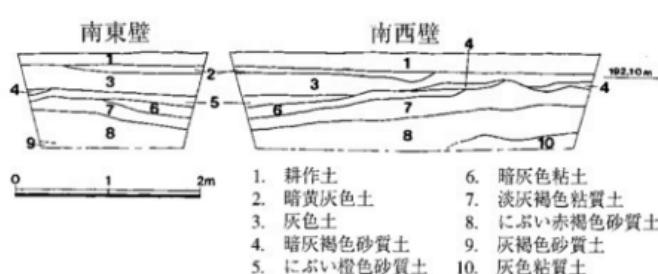
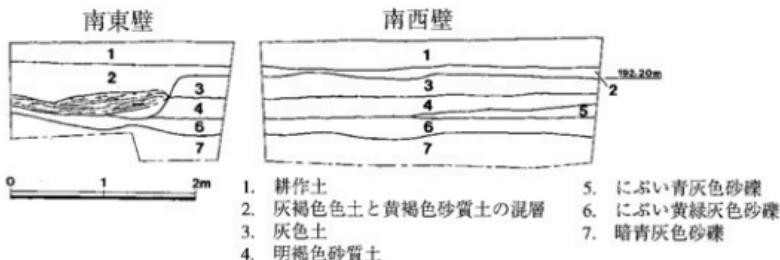
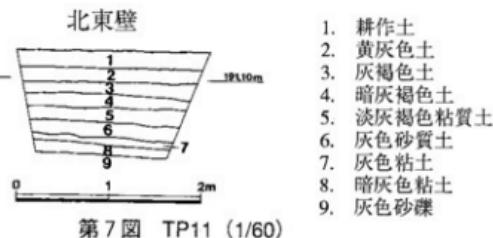
土、第4層青灰色砂礫、第5層黒灰色土、第6層暗青灰色砂礫に分層され、第5層中には有機質分を多く含み、自然流木も出土した。

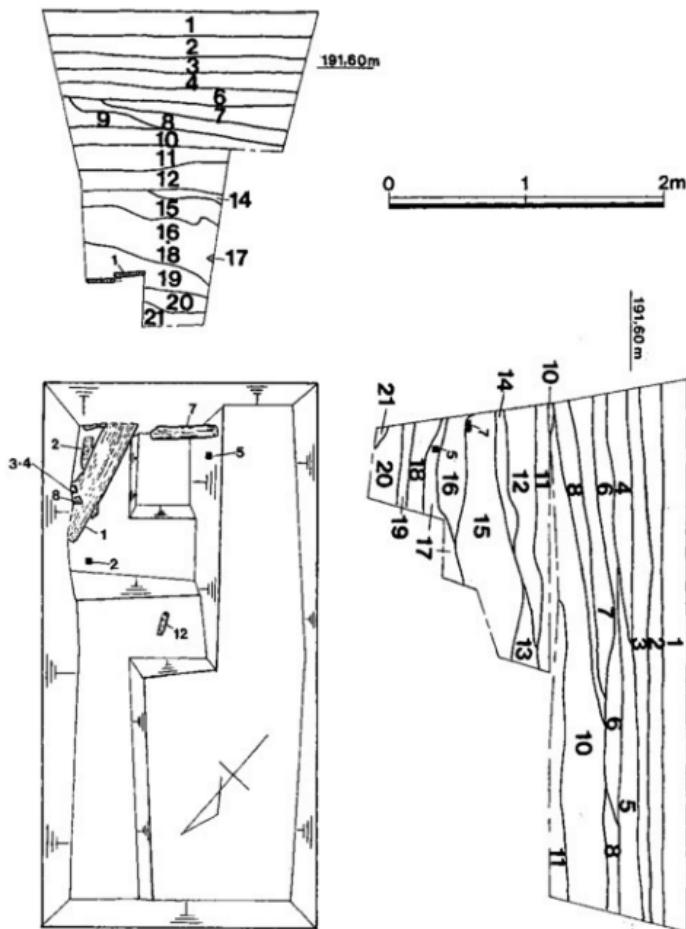
TP9もTP8と類似した堆積状況を示し、第4～6層には有機質分を多く含んだ黒灰色砂質土と粘質土が互層状の堆積をしていた。

## II 地区

TP11～23、合計13ヶ所のテストピットを設定した。

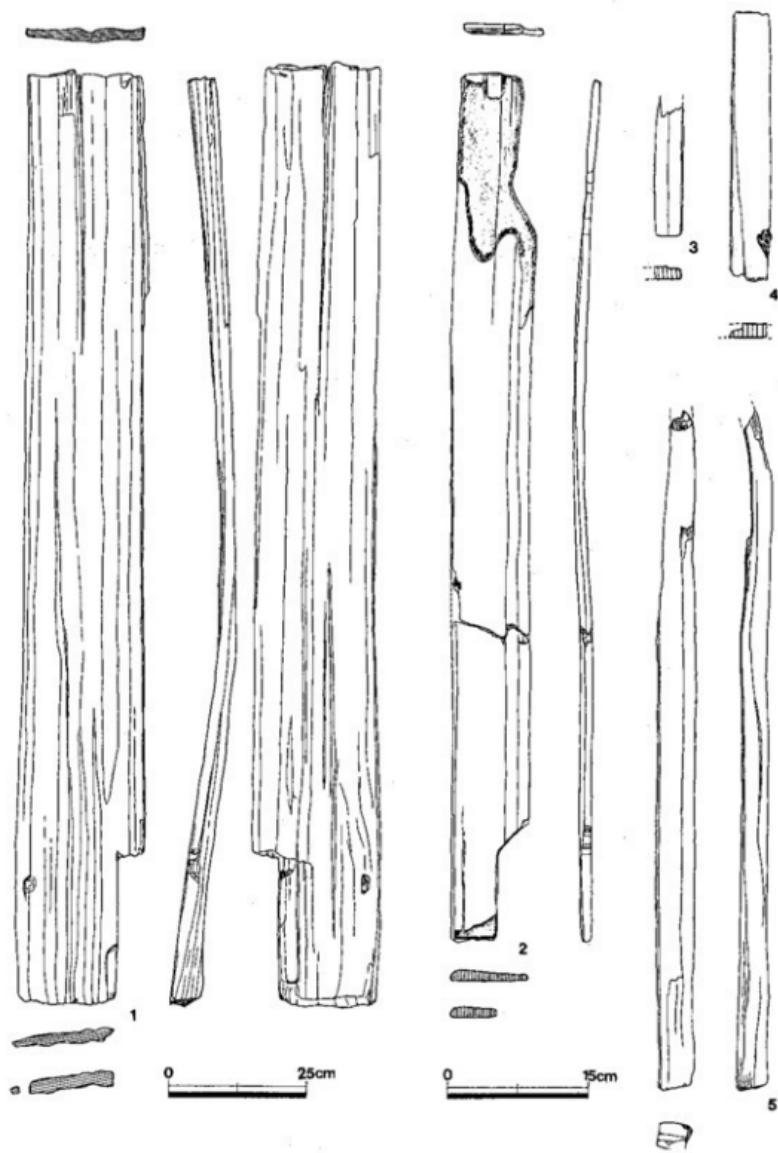
TP11は第5層以下淡灰褐色粘質土、第6層灰色砂質土、第7層灰色粘土、第8層暗灰色粘土、第9層灰色砂礫に見られるように粘土、粘質土、砂質土、砂礫層が互層状に堆積していた。TP12・13とともに、TP11と類似した堆積状況を示す。TP11～13のいずれからも、中世以前の遺物は出土しなかった。





- |            |           |             |
|------------|-----------|-------------|
| 1. 耕作土     | 8. 暗灰色粘土  | 15. 暗灰色土    |
| 2. 暗黄灰色土   | 9. 橙灰色粘土  | 16. 暗褐色有機質土 |
| 3. 灰色土     | 10. 灰色粘質土 | 17. 灰色砂礫    |
| 4. 淡灰褐色土   | 11. 淡青灰色土 | 18. 16層と同じ  |
| 5. 暗褐色砂質土  | 12. 灰色土   | 19. 灰色粘質土   |
| 6. 暗灰褐色砂質土 | 13. 茶褐色礫  | 20. 16層と同じ  |
| 7. 茶褐色砂    | 14. 灰色砂   | 21. 青灰色砂礫   |

第10図 TP16 (1/40)

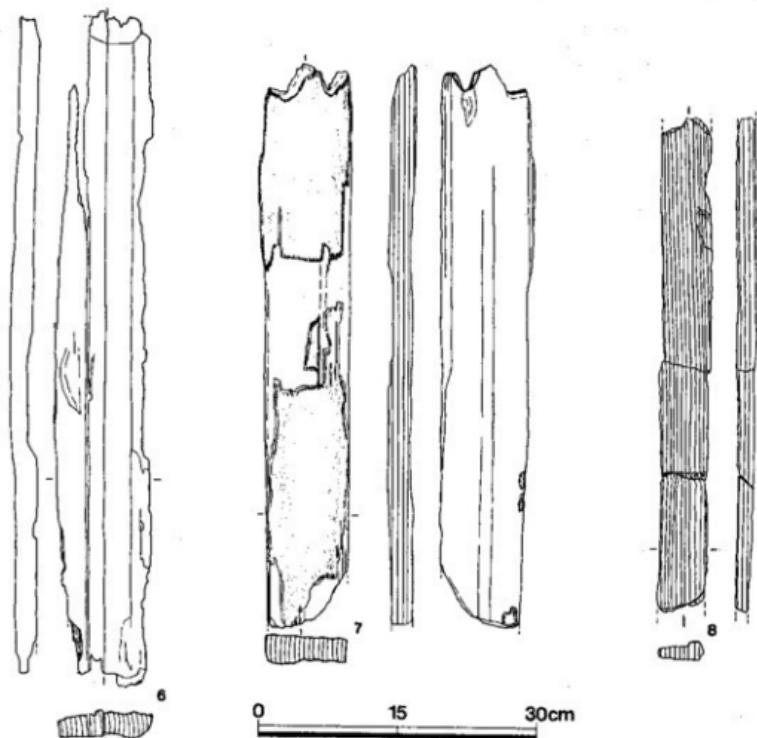


第11図 TP16出土木製品 (1:1/10、2~5:1/6)

TP 14～17は、北方向から南方向にむかった緩やかな傾斜の堆積状況を示す。いずれも、粘土、粘質土、砂質土、砂礫層が互層状に厚く堆積している。

TP 16では、第15層以下、第20層までに木製品を包含していた。第15層暗灰色土以下、第17層灰色砂礫、第19層灰色粘質土を問にはさんで、第16・18・20層暗褐色有機質土が厚く堆積している。

1は第19層中出土、2は第17層及び第19層下面から出土したものが接合したもの、3・4は第18層下面出土、5は第17層中出土、6は第16～18層あたりより出土、7は第15層下面出土、8は第18層下面出土、9は第20層中出土、12は杭の先端が第17層中で終わり、13は第16～18層あたりより出土、その他は詳細な出土層位が不明なものである。なお、15は調査区北半の第11層付近より出土した縄文土器の底部と思われる土器片である。TP 17で多量の縄文土器が出土しているにもかかわらず、TP 16での縄文土器の出土は、この1点のみである。



第12図 TP16出土木製品 (1/6)



第13図 TP16出土木製品 (1/4)、土器 (1/3)

1は長さ164cm、幅23cmを測る大型の板材である。長年にわたる土圧のためか大きく湾曲した形状で発見された。2は両端を幅狭に加工した薄手の板材である。木目の詰まった針葉樹を使用しており、その両端は炭化している。3・4はおそらく同一個体と考えられる材である。5は木目に沿って割けた材である。6は保存状況の悪い厚手の木製品である。片方の端部には、幅広のハツリの跡が認められる。7も厚手の木製品で、表面が広い範囲にわたり炭化している。8は両端の欠損した材である。9～14は杭先状の加工痕の見られるものである。11の杭先状の加工痕裏面には抉りが見られる。

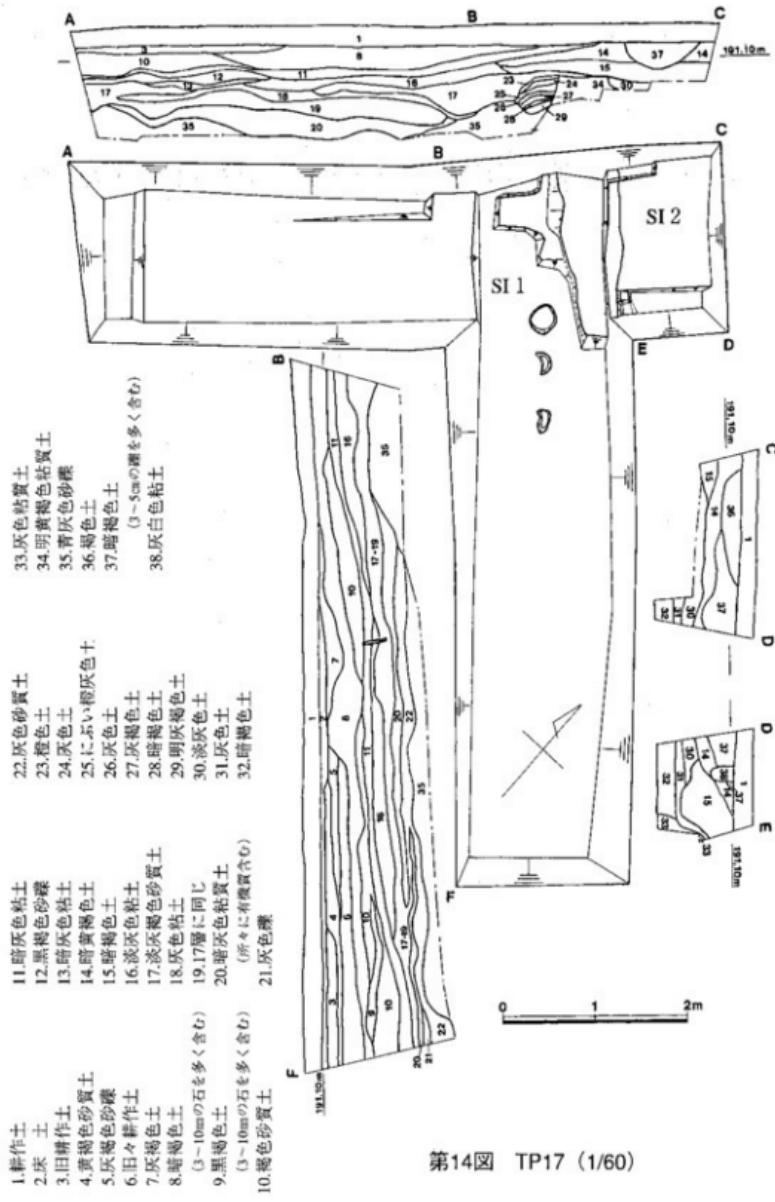
TP 17からは、調査区北半を中心に縄文土器が多く出土した。遺物の出土状況は平板実測を補助的に用い、出土地点を簡易的に記録した。調査区北部に竪穴住居跡状遺構を2ヶ所確認した。そのうち北東側のもの（S I 2）についてはサブトレンチの発掘を行い、地山の急な落ち込みがあることから遺構であることを確認した。サブトレンチ内からの出土遺物はない。南西側のもの（S II）は、調査区壁B～C間では竪穴住居跡の壁状の落ち込みが確認できたものの、他の壁面では同様の落ち込みは確認できなかった。土層堆積の状況及び遺物の出土状況から、本来の遺構のうち南半は後世に流失してしまったものと考えられる。柱穴状のくぼみを3ヶ所確認したが、いずれも浅く不整形なものもあり住居跡に伴う柱穴であるとは断定しがたい。

TP 17出土遺物の出土層位・地点は第15図のとおりである。遺構内と考えられる範囲から集中して出土しており、一部は流出したと考えられる状況で出土している。出土遺物は、実測可能なものについてはすべて掲載している。

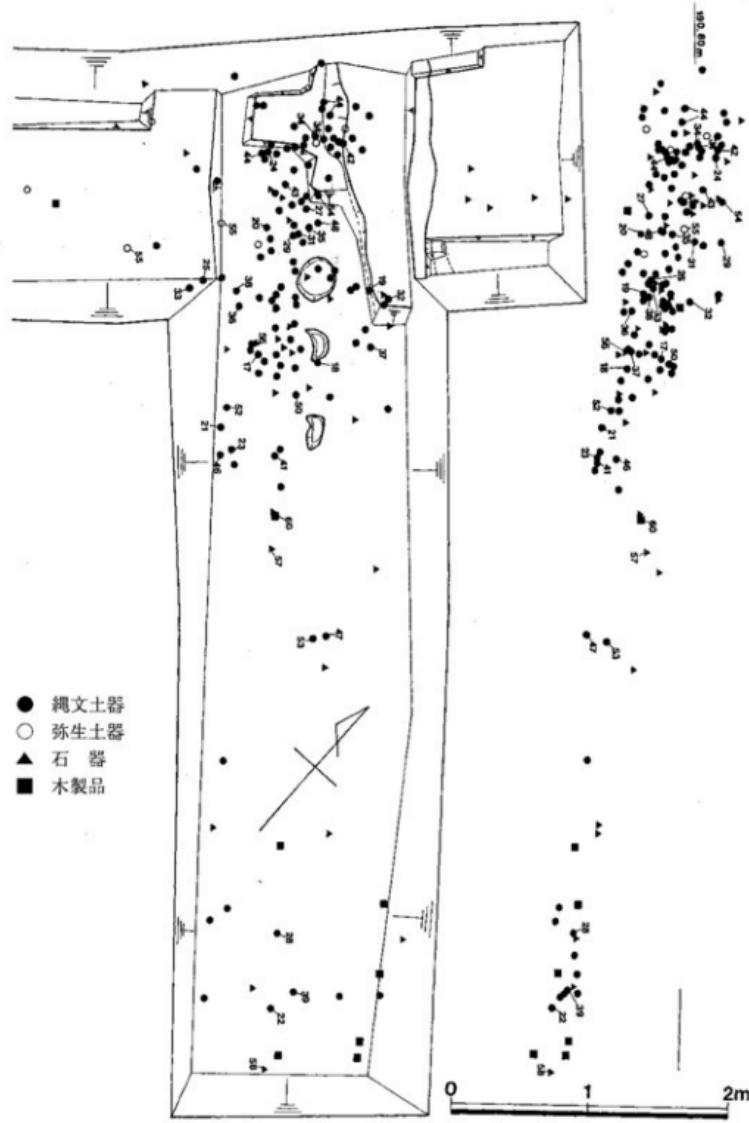
16～33は文様を有する土器である。16～29は沈線文の見られるものである。16～27は深鉢の一部かと考えられるもの、28・29は浅鉢の一部と考えられる。16～18は口縁端部または内面に沈線文を施しているもので、19～27は胴部外面に沈線文を施している。29の沈線文は他のものと比較して、やや細くはっきりとした沈線文である。30は縄文の見られる土器である。31～33は刺突文を有していると見られるもので、32・33は口縁部の可能性がある。

34～50は無文の土器である。34～42は口縁部、43～48は胴部のうち屈曲部のあるもの、49・50は屈曲部のないものである。51～54は底部である。なお、55は調査区南西寄りから出土した弥生時代後期の土器片で、胴部内面はケズリが施されている。

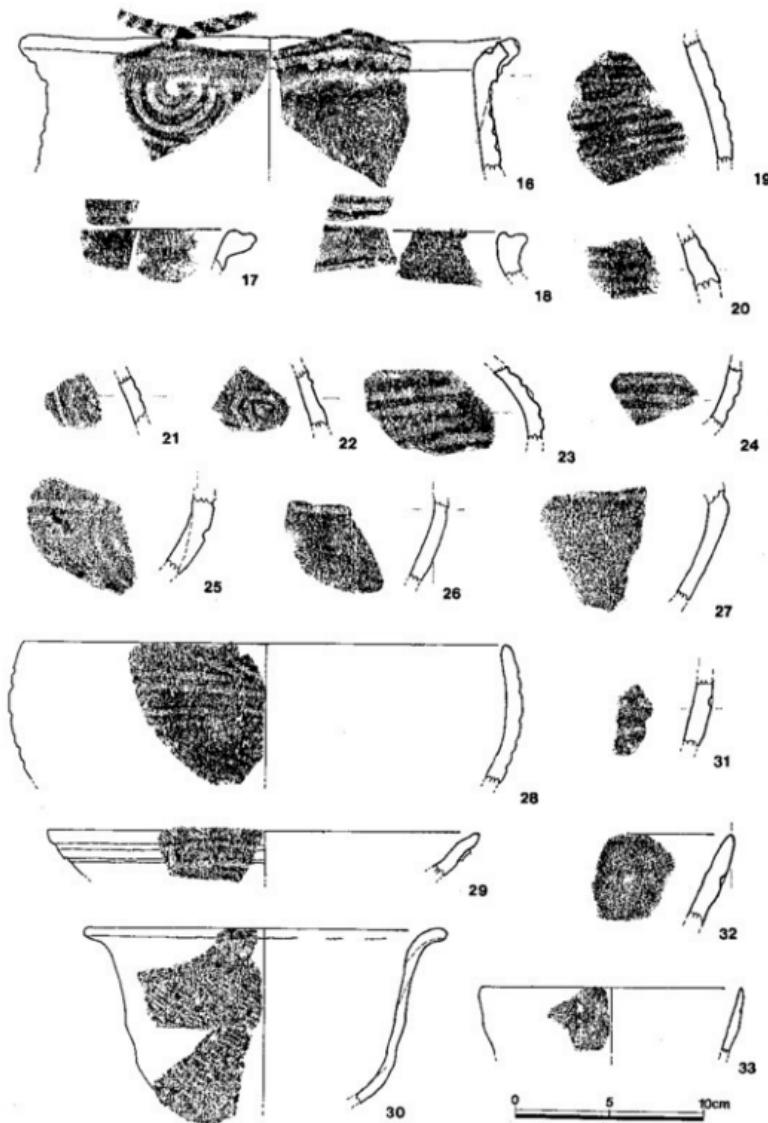
56～58は縄文土器に伴う石器である。56は偏平な楕円形の石の両端に切れ目を入れた石錘で、変成岩を用いている。57は擦り石の破片で、上面は研磨の痕跡、側面には敲打の痕跡が残る。58は打製石斧の一部であろう。なお、包含層中より二等辺三角形の形をした長さ約11cmの石を発見したので、写真のみ掲載しておく（図版4）。59・60は同調査区から出土した木製品で、59の上面は炭化している。60は杭先様の加工が見られる。



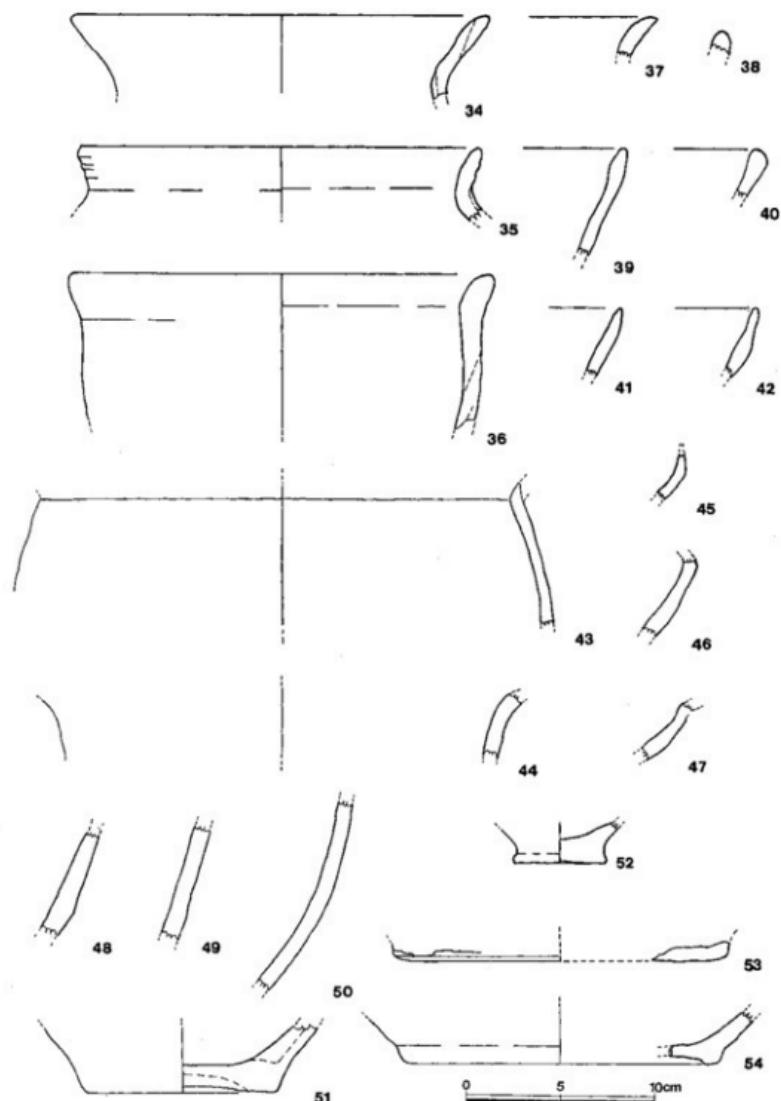
第14図 TP17 (1/60)



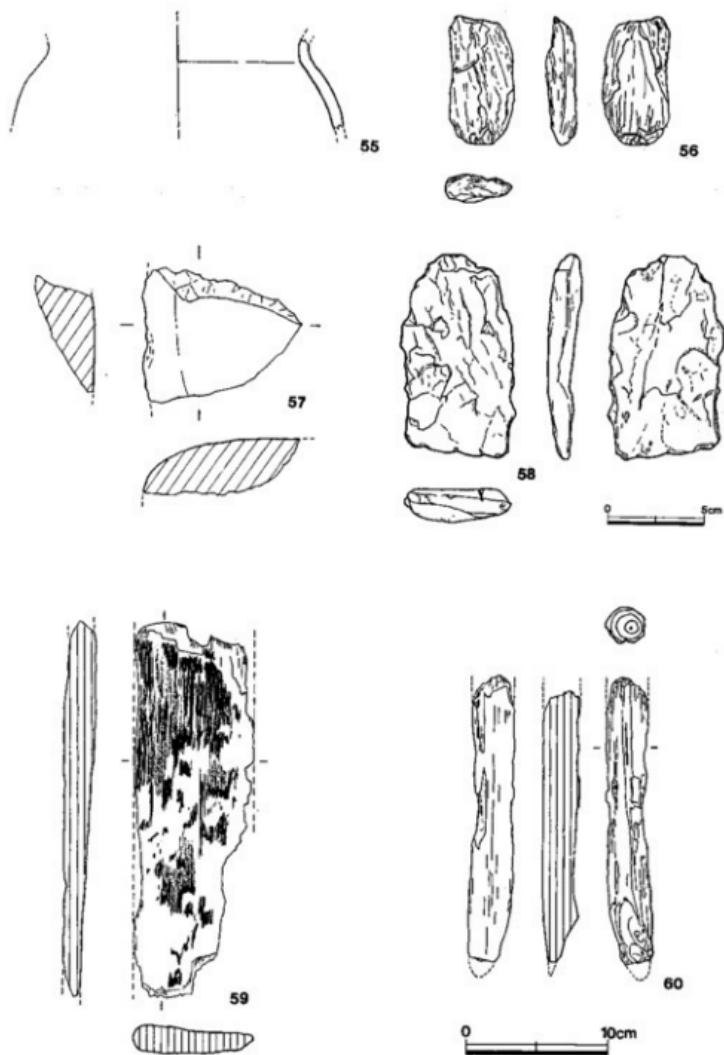
第15図 TP17遺物出土ポイント (1/40)



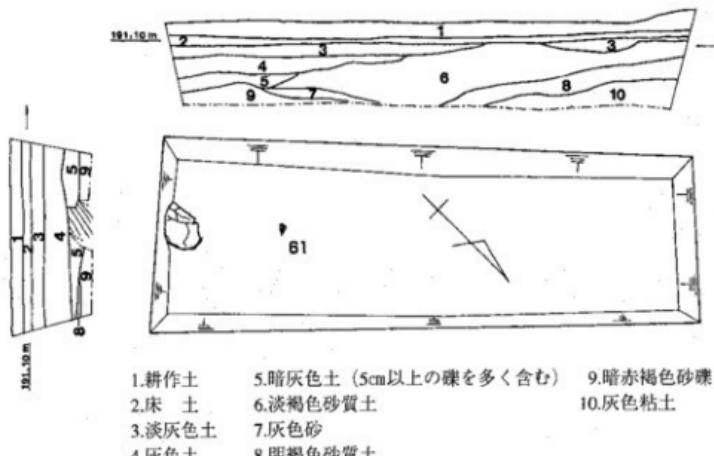
第16図 TP17出土繩文土器 (1/3)



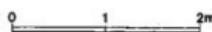
第17図 TP17出土縄文土器 (1/3)



第18図 TP17出土弥生土器・石器（1/3）、木製品（1/4）



第19図 TP19 (1/60)



TP 18~21は粘土、粘質土、砂質土、砂礫層が互層状に厚く堆積している。出土遺物は、TP 21の耕作土・床土より近世以降の陶磁器が出土したほかは、TP 19で杭先様の加工を施した木製品61が立った状態で出土したのみである。

TP 22・23は北西方向の他の調査区に比べると砂礫を多く含んだ土・砂質土・砂・砂礫など、粗い粒子を持つ土の割合が多くなる。耕作土も含め、遺物は出土していない。

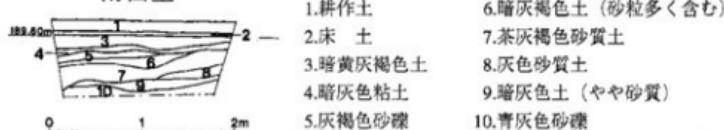
### Ⅲ地区

TP 24~31まで合計8ヶ所の試掘坑を設定した。南北を山に挟まれた狭い谷にあたる。TP 24~26及び30は涌水甚だしく、特にTP 25を除いた調査区では排水用暗渠に当たった



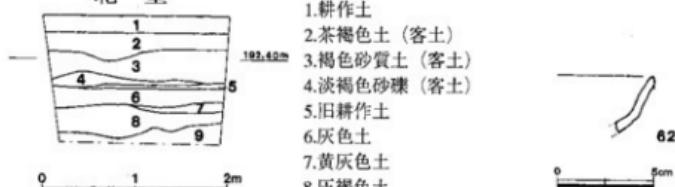
第20図 TP19出土木製品 (1/4)

南西壁



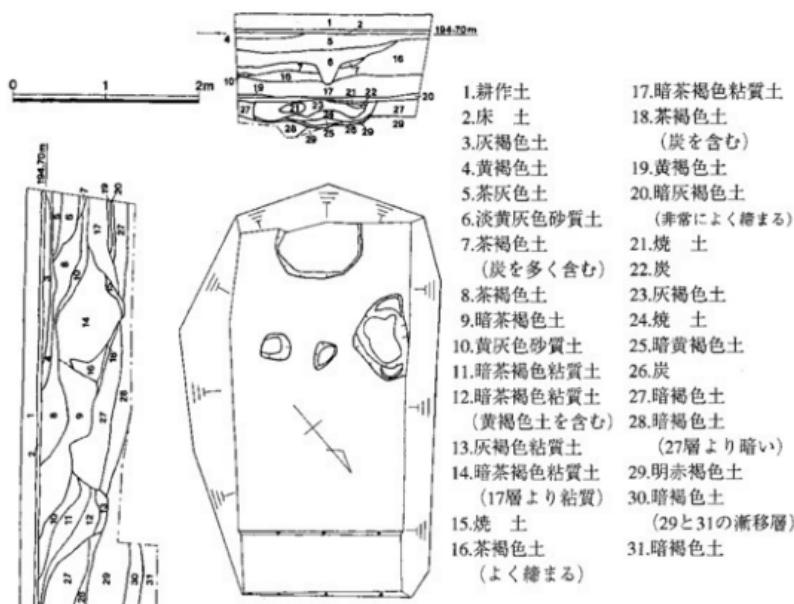
第21図 TP22 (1/60)

北壁



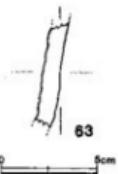
第22図 TP27 (1/60)

第23図 TP27出土須恵器 (1/3)

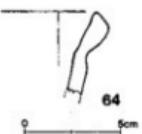


第24図 TP31 (1/60)

ため、それ以下の調査を継続することができなかつた。TP27の第6層灰色土より須恵器片**62**が出土している。TP28では、第5層下面で東から西に向かつた地山の急激な傾斜が確認されたが、同層中からは遺物の出土はなく、遺構と判断するには至らなかつた。TP29では一部に砂疊、粘質土の堆積が認められ、遺物の出土はなかつた。TP31は土坑・ピットなどが検出され、複雑な土層堆積の状況を呈していた。主な遺構面は27層上面であり、第16・17層上面も遺構面の可能性がある。南西壁にかかつた土坑では焼土・炭の堆積が確認できた。第26層までのところで、近世以降の陶磁器が多く出土している(図版4)。なお、**63**は第27層中より出土した須恵器片である。なお、**64**はTP11と22の中間付近の河床より採集した瓦質土器の鍋口縁部である。



第25図 TP31出土須恵器 (1/3)



第26図 表採遺物 (1/3)

第1表 1995年度喜時雨地区試掘調査地一覧表

TP	所 在 地	字 名	TP	所 在 地	字 名
1	大字田二穂318	焼ヶ迫	17	大字田二穂307	ウエタイエン
2	タ	タ	18	タ 308	水船
3	タ 321	タ	19	タ 307	ウエタイエン
4	タ	タ	20	タ 308	水船
5	タ 323	タ	21	タ	タ
6	タ	タ	22	タ 309	タイエン
7	タ	タ	23	タ	タ
8	タ 324	タ	24	タ 201	狭間
9	タ	タ	25	タ	タ
10	タ 325	タ	26	タ	タ
11	タ 331	西ヶ泓	27	タ	タ
12	タ	タ	28	タ	タ
13	タ	タ	29	タ	タ
14	タ 307	ウエタイエン	30	タ	タ
15	タ	タ	31	タ 199-2	鯉
16	タ	タ			

## V. 小 結

今回の試掘調査では、遺跡の範囲未確認地区であった喜時雨地区北半について文化財の分布状況を概ね把握することができた。今回の調査地区には埋蔵文化財の包蔵は少なく、遺跡は限られた場所にのみ存在していることを確認することができた。地形的にも奥まった場所であることがこの要因と考えられる。

I 地区では埋蔵文化財の存在は認められなかった。II 地区では、TP 17で縄文時代後期中頃の土器・石器を確認し、TP 16では同時代のものと考えられる木製品を検出した。遺跡の範囲は周辺の遺物の出土状況からすると、TP 16・17を中心とした比較的狭い範囲に限られるものと考えられる。この範囲のみに遺跡がみられることは、南向きの立地条件と TP 17・22付近で小河川が合流することが理由として考えられる。TP 17で出土した土器は九州地方で鐘崎式と呼ばれるものに類似している。喜時雨地区の南方にある高田遺跡の1994年度本調査X 1区からも鐘崎式に類似したものが多数出土していることから、喜時雨遺跡と高田遺跡の時期差・性格の違いが今後の検討課題となろう。他の時代の遺物をほとんど含まないこと及び遺跡の規模から、これらの遺物群は比較的一括性の高いものと考えられ、今後土器編年、遺物組成の研究資料として活用が期待されよう。III 地区ではTP 31で近世以降の遺構を確認した。地元の伝承によるとTP 31周辺は近世津和野藩主亀井氏のお仕え役であった田村氏の屋敷があったとされる場所に当たり、19c 代の陶磁器が出土していることからもこの伝承が裏付けられた。また、TP 27・31付近で須恵器の出土があったことは、近辺に古墳～平安時代のごく小規模な遺跡が存在している可能性も考える必要がある。

なお、今回の調査地区での中世遺物は河川表採の瓦質土器のみであったが、さらに上流には中世の遺跡が存在していることを示唆しているものと考えられる。周辺の所々に、中世から近世にかけての石塔が見られることからも注意が必要である。

図版1



II地区全景（北東より）



TP16木製品出土状況（南西より）



TP17遺物出土状況（南東より）



TP17竪穴住居跡状遺構検出状況（南東より）



TP17土層断面（F～B～C付近、東より）



TP31（北東より）

## 図版 2



埋め戻し作業風景



填圧作業風景



伝吉見乳母の墓



田二穗要害山石塔群

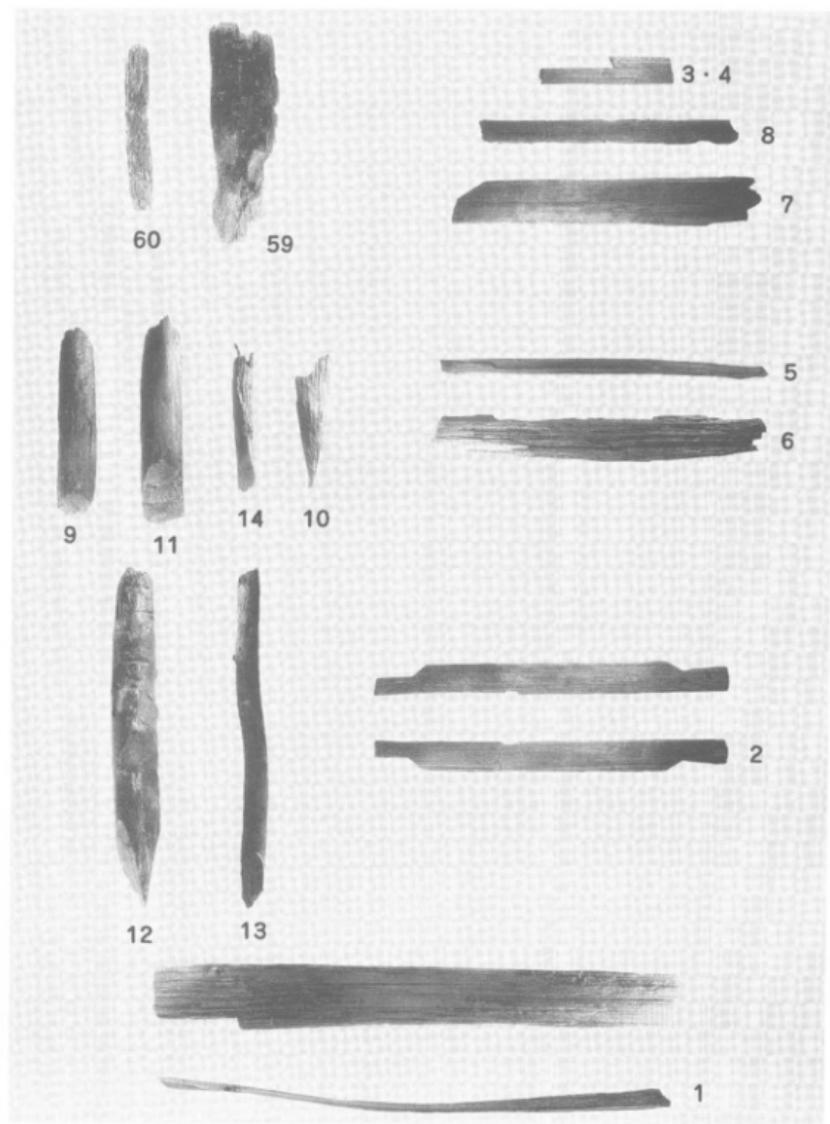


田二穗家ノ下モ石塔



要害山(左)と津和野神社裏陣城跡(右)(北西より)

図版3

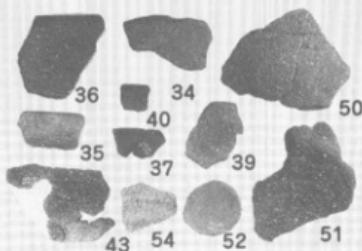


TP16・17出土木製品

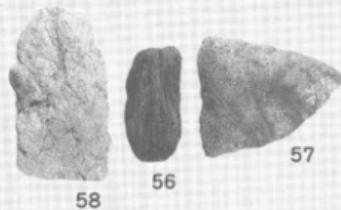
図版 4



TP17出土縄文土器（有紋）



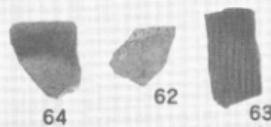
TP17出土縄文土器（無紋）



TP17出土石器



TP17出土石器



瓦質土器、須恵器



TP31出土陶磁器

## 報告書抄録

ふりがな	きじうちくまいぞうぶんかざいしくつちょうさほうこくしょ
書名	喜時雨地区埋蔵文化財試掘調査報告書
副書名	
卷次	I
シリーズ名	津和野町埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	
編著者名	宮田健一
編集機関	津和野町教育委員会
所在地	〒699-56 烏根県鹿足郡津和野町大字森村口127 TEL 08567-2-0300
発行年月日	西暦 1996年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	°'	°'			
喜時雨	鳥根県鹿足郡 津和野町大字 由二穂 喜時雨地区	W	20	34度 27分 50秒	131度 45分 30秒	19960119～ 19960308	174	遺跡範囲 確認

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
喜時雨	集落跡	縄文時代 後期	竪穴住居跡状遺構 2棟	縄文後期土器、 石器、木製品	縄文後期中頃の 比較的一括性の 高い遺物群

津和野町埋蔵文化財報告書  
豪時雨地区埋蔵文化財試掘調査報告書 I

1996（平成8）年3月

発行 津和野町教育委員会  
島根県鹿足郡津和野町大字森村口127  
印刷 (株)坂田印刷  
島根県鹿足郡津和野町大字後田口702

